

2 中高連携英語力向上 第2年次の歩み

(1) 飛騨市立古川中学校における実践

< 授業実践 >

授業実践に向けての構え

古川中学校では、このプロジェクトを通して、高等学校の英語学習の考え方や指導方法、さらには生徒の実態を把握しながら、中学校3年間でどのような力を身に付けさせることが必要かを明らかにするとともに、中学校の英語指導の現状について、高等学校の先生方に理解していただこうと取り組んできた。特に4領域をバランスよく指導するために、年間指導計画を見直し、そこからそれぞれの単元で付けたい力を絞って単元指導計画を立てることや、生徒の実態を把握し、それに応じた学習活動を仕組むことなど、現在中学校の英語指導の重点になっていることを理解していただきたいと考えた。

このような考え方をもとに、本年度の方針を次のように設定した。

- ・昨年度の反省で、「聞く力」を伸ばすことが課題となったので、それぞれどのような指導を行っているかを交流する。
- ・学習状況調査等の結果から、「書くこと」の指導が課題となっており、個々の学習状況を把握するとともに、目指す姿を明確にした指導計画の作成・改善を図る。
- ・「聞くこと」と「書くこと」の言語活動に関連をもたせた指導方法の工夫改善を共通のテーマとして取り組む。

第1回授業交流研究会

【期日】 平成18年6月29日(木)

【公開授業】

- ・単元名 New Horizon English Course 1 Unit 4 日本大好き
- ・授業学校・学年 古川中学校 1年
- ・主な提案内容



「話すこと」(イ)「自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと」及び「聞くこと」(ウ)「質問や依頼などを聞いて適切に応じること」を指導事項の中心とし、“What’s your favorite subject?”等の質問に対して、“Math. It’s interesting.” というように、自分の思いを付け加えて答える活動を行った。学習過程としては、教科書の内容を学習した後、その表現を使ってペアで対話活動を行うことによって定着を図るとともに、書く力を付けるために、終末には自分が1時間の授業の中で話せるようになった英語を書く活動を取り入れた。

【授業研究会】

- ・仲間同士、自然に活動ができる雰囲気があり、学習集団の育成がなされている。
- ・次々といろいろな活動が工夫されており、ペアやグループ活動に生徒が生き生きと取り組んでいた。
- ・1時間の中に、「聞く」「読む」「書く」「話す」活動があり、それぞれの領域を関連させた指導を意識しているが、単にすべての領域を扱うのではなく、単元の中の本時の位置付けとねらいを明確にして、「ねらい」「学習課題」「学習活動」「評価」の整合を図ることが必要である。
- ・対話活動をより実践的にするために、ALTの活用を工夫するとよい。

第2回授業交流研究会

【期日】 平成18年10月24日(火)

【公開授業】

- ・ 単元名 New Horizon English Course 2 Unit 4 Homestay in the United States
- ・ 授業学校・学年 古川中学校 2年
- ・ 主な提案内容

「書くこと」(イ)「聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書いたりすること」を指導事項の中心とし、Unit4で学習した助動詞を使ってALTの悩みに対して英語でアドバイスを書く活動を行った。第1回の交流会で話題になったことを受けて言語活動を絞り、「自分の思いが相手に伝わるように、書きたいことの構成を考えて書くこと」にして、慰めや励ましの言葉、アドバイス、それによって期待されることという順序で書く指導をした。また、授業の始めに帯活動として前時に学習した表現を書く小テストを行い、本時の書く活動につながるように工夫した。

【授業研究会】

- ・ ALTが友人関係のことで悩んでいるという導入から、それに対してアドバイスを書こうというコミュニケーションの必然性が生じて、生徒が自然に活動に取り組むことができた。
- ・ 生徒の実態に応じた学習活動が工夫されており、自分の伝えたいことを英語で一生懸命に書こうとする姿があった。
- ・ ホワイトボードを活用して、生徒の作品の交流をすることにより、それを参考にしながら自分の作品に一文つけたして書くことができた。
- ・ 教師が本時のねらいを明確にして、具体的な生徒の姿や英語を分かりやすく説明することが大切である。それにより、1時間で何ができたかよいのかが生徒にとって明確になる。また、それを生徒の自己評価や評価規準につなげていくことも大切である。
- ・ 生徒の作品に対して、教師がねらいに応じて何を価値付け、評価するかを明確にするとともに、ALTによる評価も Good job! といった励ましの言葉だけではなく、ねらいに応じた評価の観点を打ち合わせておく必要がある。

<グローバル・スタンダードによる英語力分析調査>

【期日】 平成18年8月18日(金)

【受験者】 スターターズ... 11名 ムーバーズ... 28名 フライヤーズ... 2名

【結果分析】

- ・ 希望者を募って行ったため、受験者は英語の学習に意欲的な生徒ばかりであったが、結果を世界平均と比較すると、どの項目においてもさらに指導の充実が必要であると感じた。
- ・ 領域別に見ると、スターターズとフライヤーズでスピーキングの結果が世界平均に達しており、授業で対話形式の活動を多く取り入れている成果が現れていると思われる。一方、すべてのレベルにおいてリーディング、ライティングおよびリスニングの力が付いていないという結果が出た。特にリスニングに関して、受験した生徒の感想では、Native speakerによって話された英語を聞き取ることが難しかったということなので、ALTの活用の仕方を工夫したり、Classroom Englishの改善を図ったりして、継続的に指導していかなければならないと考える。

< 学習環境の充実 >

- ・自分達の住む町を英語で紹介する活動等で利用するために、「日本の文化を世界に伝える英文書」シリーズを購入した。食べ物や祭りなどの文化を英語で説明するために、どのような表現を用いたらよいか参考になった。また、日本の文化を外国から見る機会にもなった。
- ・教科書にある「道案内」や「電話での会話」を視覚的に導入し、練習するために、「場面と言葉」の表現活動ビデオを購入した。映像によって場面設定が容易になったとともに、そこにある表現を用いてスキットをすることによって定着を図ることができた。また、英語特有の表現を学ぶことにも役立った。
- ・「小学校英語ピクチャーカード」や「絵でわかる英語辞典」を、特殊学級の英語の授業で活用することによって、英語に親しみ、楽しみながら英語の学習をすることができた。

< 成果と課題 >

2年間の交流を通して、それぞれが目指していることや、それに対してどのような指導を行っているかを共通理解することができた。

中学校を卒業した生徒が、高等学校でどのような英語学習をしているかを実際に見て、どんなことで苦労をしているかを知ることができ、あらためて中学校での基礎・基本の指導の大切さを実感したとともに、Listening に関して継続的、段階的な指導の必要性を感じた。

高等学校では、入学時に中学校の教科書にある基本文や重要文を扱った習熟度テストを行って生徒の実態把握（特に「話す・書く力」）をしており、その問題内容やデータを交流することによって、中学校での指導の改善に役立てることができた。

高等学校の授業を参観して、最も基本的なことである音読の重要性を再認識した。また、生徒が意欲的に取り組み、学習内容を定着させることにも有効な Look up Reading や、生徒同士の Repeating などは、中学校でも取り入れるようにしていきたい。また、「書く力」をつけるために、高等学校では家庭学習との連動を図っていることから、中学校でも「単位時間の終末」「家庭学習」「次の時間の導入（帯活動）」という流れで、書く力の定着を図りたいと考える。

当初の打ち合わせでは、計4回の授業交流にとどまらず、もっと気軽に交流を行い、高等学校で期待される英語の力と、中学校の3年間で身に付けさせようとしている英語の力のすりあわせをして指導に生かしていこうということを話し合った。しかし、日常的な交流が十分にできなかったため、今後、継続して交流を図ることにより、さらに連携を深められるようにしたい。